

損失回避は実験室でつくられるアーティファクトなのか

○長谷 和久
(山口大学教育学部)

人の価値判断における記述的な特徴を示したプロスペクト理論において、人は獲得事象に比べて損失事象に対して強い心理的インパクトを感じるとの想定がなされる。こうした傾向は損失回避 (loss aversion) と呼ばれる (Kahneman & Tversky, 1979)。損失回避は文化を問わず見られる普遍的で、非常に頑健な認知バイアスとされ、その実在性が疑われることはなかった。

このなかで、近年の研究では、小額の損失に対して損失回避の実在性に疑問を呈する研究が増加しており、損失回避の実在性や境界条件をめぐる議論がなされている (Nagaya, 2021)。それらの研究の中では、損失回避に分類される行動や選好は「損失を避ける」ことによって引き起こされるのではなく、「行為を避ける」という不作為への選好によって生じることが示されている。

長谷 (2025) では、損失回避が不作為への選好によってもたらされることを示してはいたが、損失回避の指標になる選択肢の中に「0 (ゼロ) になる」との説明が存在し、ゼロへの回避と交絡するパラダイムを用いていた。本研究では、ゼロを選択肢の中に含まないパラダイムを用いた場合も長谷 (2025) の結果が再現されるかを検討することを目的とした。

方法

参加者 WEB モニタ 128 名を対象に実施した。参加者の平均年齢は 55.34 歳 ($SD = 13.64$) であった。

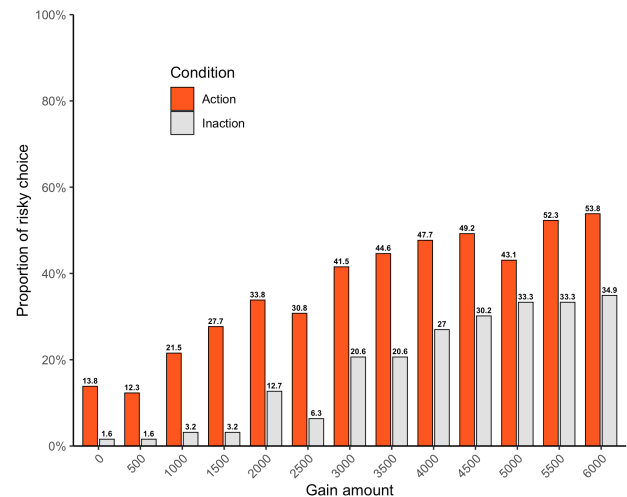
材料 損失回避を測定するため、「50%の確率で 1000 円獲得できて、50%の確率で 1000 円失う賭け」といった獲得と損失が同じ確率で生じるリスク下の意思決定課題に回答を求めた。賭けは計 13 種類あり損失額は 3000 円で一定であったものの、獲得額は 0 円から 6000 円まで 500 円間隔で変化した。参加者はこうした賭けを始める前に、所持金が 3000 円存在する過程のもとで賭けが開始される旨伝えられた。不作為条件では、たとえば「所持金の 3,000 円が 50%の確率で 3,500 円になるが、50%の確率で 0 円になる賭けに、あなたは賭けますか？」に対して「賭ける」

「賭けない」の 2 肢で回答した。一方で、作為条件では「所持金の 3,000 円が 50%の確率で 3,500 円になるが、50%の確率で 0 円になる賭け」と「所持金の 3,000 円が 100%の確率で 3,000 円になる賭け」という 2 肢が提示され、どちらかの賭けを選ぶよう求められた。このように、不作為条件と作為条件とでは、同じ内容の意思決定課題が提示されたが、作為条件では「賭けない」といった不作為を可能にする選択肢はなく、どちらかの賭けを選ぶ必要があった。長谷 (2025) の不作為条件では「100%の確率で 0 円になる」との説明であったが、3000 円の所持金を想定することで、当該の選択肢から 0 (ゼロ) の表記削除した。

結果と考察

それぞれの賭けに対して「賭ける」というリスクのある選択肢を選んだ割合を実験条件 (作為条件, 不作為条件) ごとに Figure 1 に示した。

Figure 1. リスクのある選択肢を選んだ割合



実験条件 (作為条件: 0, 不作為条件: 1), 獲得金額 (0 円から 6000 円までの 500 円刻みで変化), 交互作用項目を説明変数, 賭けの選択 (賭ける: 0, 賭けない: 1) を目的変数とするロジスティック回帰分析を実施した。分析の結果, 実験条件の効果 ($b = -1.24, p < .001$), 獲得金額の効果 ($b = 0.59, p < .001$), 交互作用 ($b = 0.40, p = .003$) が有意であった。これらの結果は、長谷 (2025) を再現するものであり、損失回避が不作為への選好によって生じることが示唆されている。